

第3章 ハイパーテキストと文学理論

3-1 「読む」理論

本章では、読者を強く意識した文学理論である受容理論を、小説のハイパーテキスト化に際して応用する可能性について考察する。これは、第4章に引き継がれるが、文学理論のうち「読む」理論からのアプローチである。

受容理論は、文学理論の立場から多様な読書の可能性を示したものであり、ハイパーテキストはその理論を実証する場として位置付けることができる。従来、書籍等の紙媒体に依存していた言語芸術作品は、電子テキスト化によって戯曲や楽譜のような存在となるわけだが、本章ではハイパーテキスト小説作成にあたっての理論的支柱として受容理論が応用可能であることを示す。さらに、この仮説に基づき具体例として[145]を原テキストにハイパーテキストの経路に着目した試作と多様な読みの可能性に着目した試作を行い、小説のハイパーテキスト化における問題点と課題を明らかにする。

リニアテキストにおける情報の配置は、著者が使用する修辞と協調して読者の理解を制御ようになってきている。修辞学が対象としたのは、文レベルの技術であり、狭義には文彩を希求するものであった[9] [55]。推理小説に関しては20世紀初頭に時を同じくして現

代にも大きな影響を与えている2つのルール集[150][50]が発表されている。後者はルール集とこれに従った「良い」探偵小説を集めたものだが、後年他の作家がわざとルールを破っても推理小説が立派に成立するというを示している[128]。反面でその著者自身が[50]の見解が正しいことも認めている。

ハイパーテキストは、テキストの新しい組織化方法として辞書、辞典の類や論説文、論文など説明的解説的な文章に適用されるのが一般的であった。さらに近年は、小説や詩歌などの文学テキストもハイパーテキスト化されている。最初からハイパーテキストとして執筆された小説[39]は数少ないが、ハイパーテキスト小説において読者は自らの判断でストーリーの展開を選択することが可能となる。これはゲームブックなどの書籍[42][114]でも一部は実現されていたが、ハイパーテキストによって数々の読書支援機能を使用できたり、複数の読み方を並行させて楽しむことや、他人と情報交換をしながら読み進めることが可能となるなど、読書という行為に様々な新たな機能を付加していると考えられる。

3-2 「読者」を中心に置いた文学理論の系譜

文学理論とハイパーテキストは、「読む」と「書く」という行為に関して理論と具体化という相補的關係にあると見ることができる。文学的なテキストは作者のみならず、読者との相互的な関係で成立することを示し、さらに読者による自由な「読み」の可能性を提起したのは、脱構築あるいはポスト構造主義などの文学理論であった。一方でハイパーテキストは、順序を排して読者に多様な「読み」の選択肢を与え、さらに読者が「書く」ことさえも可能としたテクノロジーと考えられる。George Landow は、文学理論とコンピュータ・サイエンスとの接点をハイパーテキストに収斂させている[51][52]。

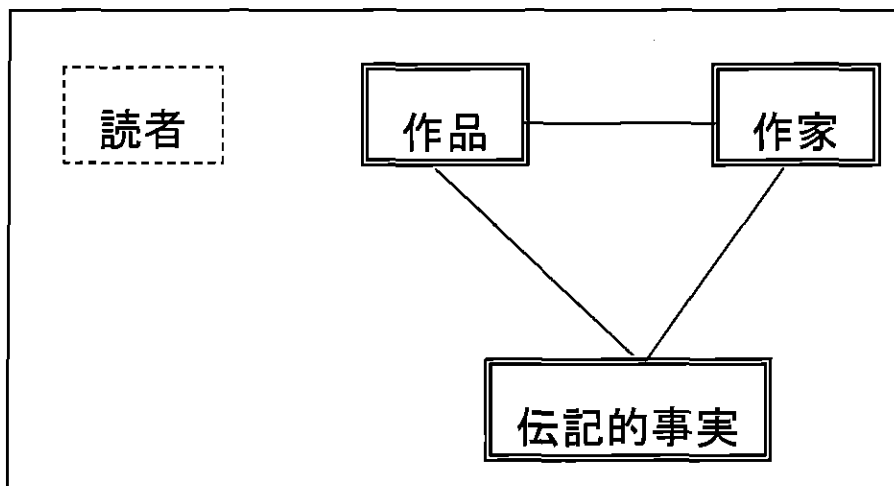
2-2-2 節で述べたが Roland Barthes は、「テキスト」を方法論的な場として捉え、作品と読者の距離をなくすものとして規定している。Barthes の試みによって、テキストという概念は作者の主権を奪うだけでなく、「書く」という行為の特権性をも排除することとなった。

文学理論におけるテキストの概念は、上述したように自由な「読み」を可能とするものであった。ハイパーテキストは、それをさらにテキストに対する「書く」という行為の可能性までも提供することになった。ハイパーテキストをコンピュータによって読む際に、読者による注釈を同じモニタ上に書き加えることが可能であるし、関連するテキストへリンクを付加することもできる。個人がインターネット上に Web を開設するという行為は、

WWW がシステムとして実現させたものである。だがこれは同時に、無数に広がるハイパーテキストの社会に新たなハイパーテキストを付加するということでもある。ブラウザで閲覧して（読んで）いたハイパーテキスト群に、自分の Web をリンクさせ（書き加え）るわけである。テキストの概念とは、このような見方を可能とさせるものである。

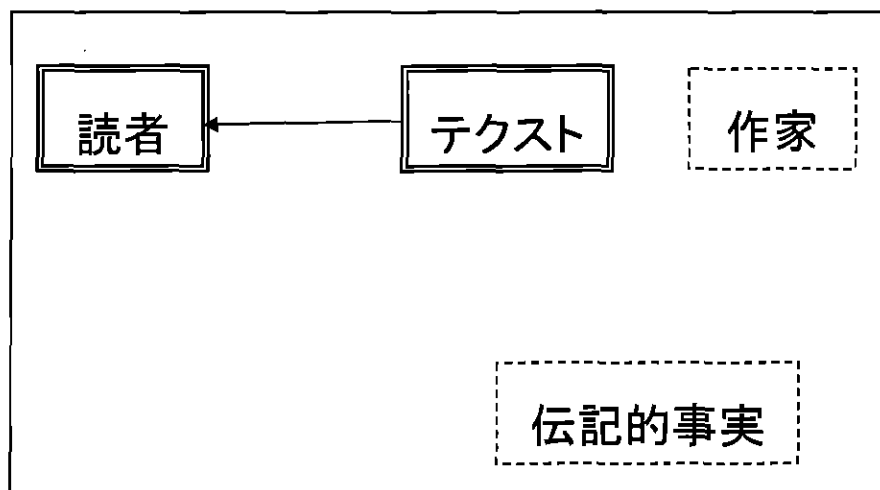
受容理論は、「読者」という存在を強く意識した理論である。「文学作品の作者としての読者」というパラドキシカルな概念は、以下のようにして成立した。これは、文学研究が科学的手法を得るために辿った変遷とも重なるものと考えられる。

20 世紀初頭に確立された実証主義的文学研究は、図 3-1 に示したように作品の意味と作者の意図を作者の伝記的事実を用いて説明することを目指した。ここでは読者の存在は問題にならず、作品は作家と作家の伝記的事実とによる三角形の中に収められている。作品は作家と不可分であり、作品を説明するために作者の伝記的事実が必要であった。



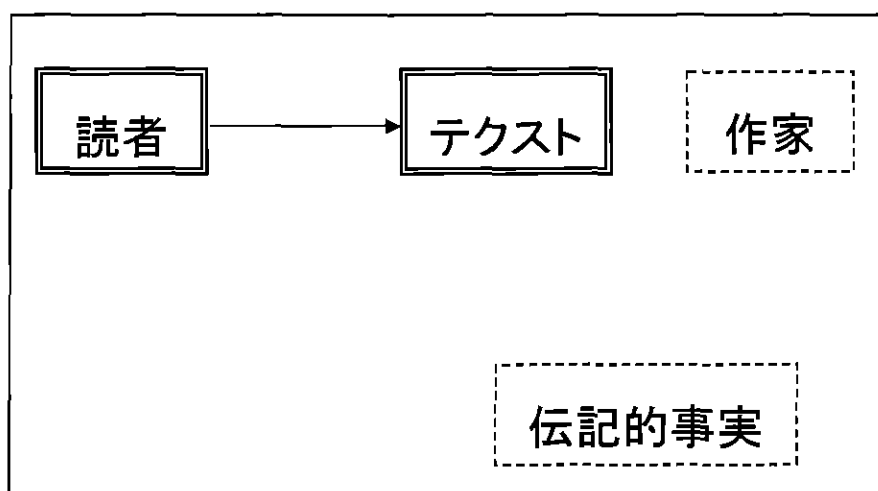
<図 3-1：実証主義的文学研究の構図>

続いて 1950 年代のアメリカに登場したのが、図 3-2 に示した作品の自律性を標榜するニュー・クリティシズムであった。作者は作品から切り離されて、作者の意図を追及する「解釈」ではなく、自律的なテキストの「批評」が文学研究の中心となった。2-2-2 節で述べた「テキスト」概念が使用されている。つまりテキストとは、読者による様々な読みを成立させるものである。ここにテキストと読者とのコミュニケーションが始まったことになる。だが図 3-2 のコミュニケーションは、あくまでテキストありきのものである。そのため矢印は、テキストから読者へと向けられている。



<図 3-2 : ニュー・クリティシズム以降の文学研究の構図>

Hans Robert Jauss によって提唱された受容理論は、作者や作品を中心とした文学研究に代わり、図 3-3 に示したように読者とテキストとの関係から読者を中心とした文学史の構築を目指したものである。文学とは、能動的な読者の経験を通して歴史化されるものという認識がその根底にある[43].



<図 3-3 : 受容理論>

ここで明らかに作者の特権は剥奪される。それどころか「文学テキストの作者としての読者」というパラドキシカルな概念が成立することになる。つまり、読書の一回ごとに読者の中に新たなテキストが成立するというものである。従って図 3-3 では、読者からテク

ストへ矢印が向けられている。テキストと読者の関係が変容しているのだ。

Wolfgang Iser は、テキストと読者の絡み合いによって文学作品が顕在化する、という立場を取る。Iser は、テキストの様々な顕在化を可能とする読書という行為の解明によって読者の能動性を示した[40]。Jauss と Iser はそれぞれの理論を展開した際に所属していたドイツ南部の大学の名称を取り、コンスタンツ学派と総称されることがある[35]。

これらに対してアメリカで Stanley Fish によって提唱されたのが、読者反応批評である。Fish は、紙に印刷されたテキストとしての作品は活字として固定化されているが、実際には読者それぞれに、また読書の際ごとに読者のイメージや観念として再構成されるものこそがテキストである、という考え方を示した[23]。

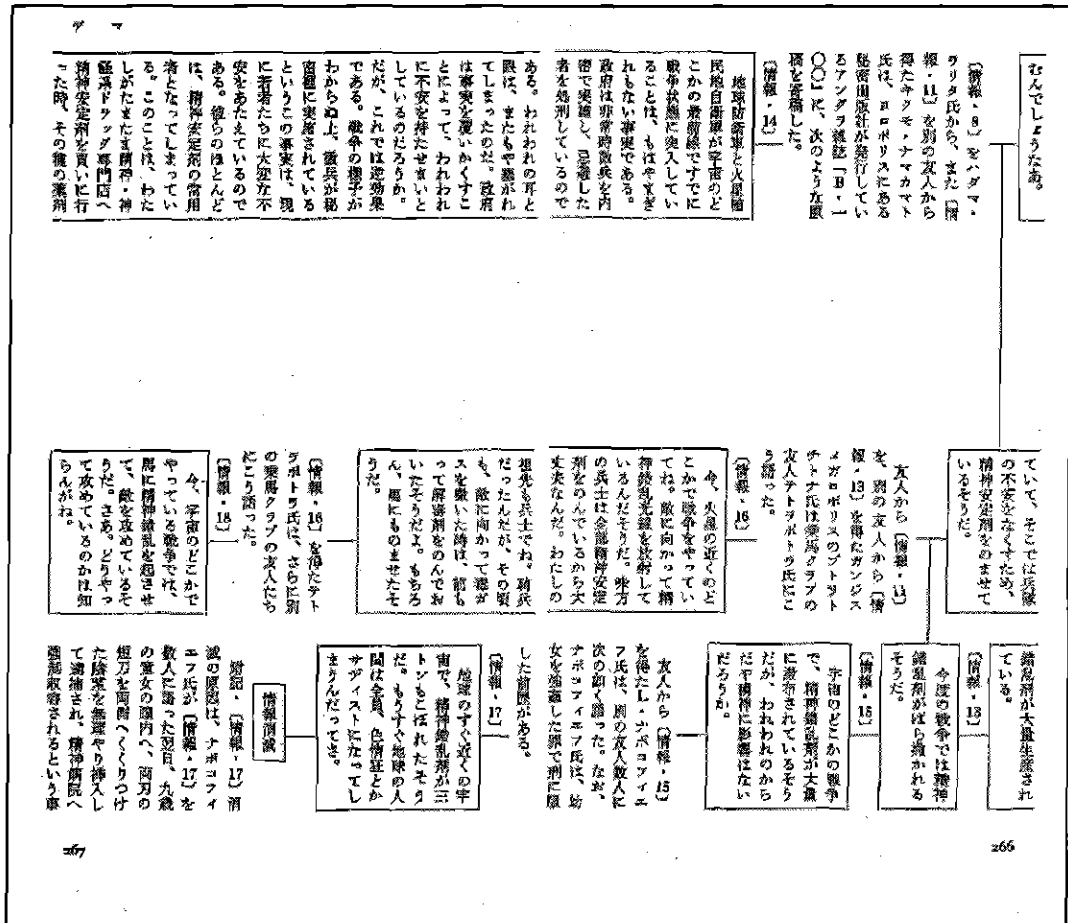
Iser や Fish は、物理的な存在としての冊子体の書物ではなく、読書という行為によって読者の中に形成されるテキストを文学研究の対象とした。ハイパーテキストは、読者が読む順序や読みたい箇所を選ぶことを可能とする。David Bolter は、コンピュータによってテキストが戯曲や楽譜のような存在となったことを指摘している[13]。受容理論は、ハイパーテキストによって具体的な検証を行う場を得たと考えることが可能なのではないか。作者が示すのは、潜在的なテキストにすぎず、読者によってその間隙が埋められ、あるいは選択が行われることによって顕在化する。紙に印刷された書物を念頭に置くと逆説的に見えるが、テキストをまとまりのあるページや順序の概念から解放したハイパーテキストでは、読者による順序の選択や加筆というテキストの変容を容易に行うことができる。

3-3 実験小説「デマ」

縦書きでも横書きでも表記可能という日本語の特性を生かした表現上の冒険は、大正時代にダダイズムの詩として、活版印刷の技法を駆使したもの[28]などが見られた[48]。実験小説は、内容よりもメソッドを重視して言語による表現の可能性を追究する。活字や組み版に特徴を出すもの、表層的には通常の小説と異なるわけではないが修辞によってメソッドを際立たせるもの、両者を兼ね備えるものなどがある[106]。

本章では、こうしたテキストから「デマ」[145]を選んでハイパーテキスト化する試みを行った。このテキストは、表題通りに根拠の無い噂が様々な経路を辿って流布変容して行く様を描いたものである。全体で9000文字余りのテキストだが、原テキストの表記方法は通常と異なり、図3-4にあるようにひとかたまりの意味のある文字列がレクシ（テキスト

の読解単位)として罫線で長方形にくくられている。それぞれのレクシは [前提], [事実], [情報], [情報消滅], [附記], [結論]に分類されており, 各々は作者によって罫線で関連付けられて, 言わばトレイル構造 (リンク) が明示されている。また, このうち[前提]と[結論]は, このテキスト全体の外枠となっている。これは, Barthes の手法[8]と類似している。



<図 3-4: 「デマ」原テキストの版面>

このように「デマ」は, 紙に印刷されていながら表記方法としてハイパーテキストの形式に近いテキストであることに着目した。ハイパーテキストは, 順序を排した構造となるが, 原テキストは噂の流布状態を表現している。分類によるレクシの数は表 3-1 に示した。なお[事実]の丸括弧内数は, 原テキスト表記では異なるがノードとして扱ったものである。

<表 3-1：レクシの分類>

[事実]	3(+1)
[情報]	49
[情報消滅]	8
[附記]	4

物語の展開上で時系列データを全く無視するわけには行かない。分類されたレクシには番号が付されているが、後述するトレイルに属するために必ずしも番号が順序と一致するものではない。原作においてテキスト内に明示された時系列データは、以下の通りである。

<表 3-2：時系列データ>

[事実・1]：2046年6月20日
[情報・1]：2046年6月21～28日
[事実・2]：2046年7月
[事実・3]：2046年7月22日
[前提]，[結論]：2046年8月

この他に、テキストの内容から、[情報・24]以降は[情報・14]よりも遅いこと、[情報・7]以降と[事実・2]以降はほぼ同時に推移することが、類推可能である。

3-4 ハイパーテキスト版「デマ」

原作をハイパーテキスト化するにあたって、事前にテキストを操作する必要があった。原作のレクシには、[事実・〇〇]や[情報・〇〇]と冠したものには前書きのように説明文が付せられているものがある。この前書きはそれぞれの[事実・〇〇]や[情報・〇〇]に含むものとして、レクシをノードの単位とした。[情報消滅]に[附記]があるものも同様とした。例外として、枝トレイルが派生する[情報・24]の前書きとなっている部分は、独立させて[事実・〇]と同等のノードとした。(トレイルの構成に関しては、図 3-6 を参照) 作者が原作で明示したリンクは文書名をアンカーとして、忠実に実装した。しかしながら、[情報・43]から [情報・45]へのリンクは不可能であり、[情報・13]から [情報・16]，[情報・11]から

[情報・14]へのリンクは、文書名をアンカーとしたために逆向きとなってしまった。次に、レクシの結合関係を示すトレイル（経路=リンク）の構成を以下に示す。

＜表 3-3:「デマ」のトレイル構成＞

＜幹トレイル＞	＜枝トレイル＞
① ([事実・1]) ----- [情報・1] -----	I-I 精神的ヨクセイ L I-II 齒
② ([事実・2]) --- [情報・9] --- [情報・10] ---	I-II 乗馬クラブ L II-II 色情狂
③ ([情報・24] 前書) -----	III-I 厚生省長官 T III-II 厚生省医薬局長 (対土星戦争) L III-III 厚生省医薬局調査部長 (対月戦争)
④ ([事実・3]) -----	枝トレイル無し (対火星戦争)

上記の幹トレイル①を例としてリンクの生成について述べる。まず、[情報・1]に含まれる「精神的ヨクセイ」、「齒」を手がかり語とする。このうち「齒」は[情報・3]、[情報・5]以外のレクシには含まれていないので、枝トレイル I-II の生成は最も容易である。

＜表 3-4: 枝トレイル I-II の生成＞

[情報・1] 「精神的ヨクセイ」, 「齒」
[情報・3] 「齒」
[情報・5] 「齒」

枝トレイル I-I の場合は、「精神的ヨクセイ」から「精神安定剤」（[情報・2]～[情報・14]）を類推し、さらに「アングラ雑誌B・一〇〇」から「地下百階」、「地下革命軍」（[情報・14]～[情報・28]）という表層、深層ともに意味が変容する手がかり語に着目しなければならぬ。また、「精神安定剤」は幹トレイル②でも重要な手がかり語となる。従って、単純に語抽出を行うだけではリンクの生成は不可能である。

<表 3-5 : 枝トレイル I-I の生成>

[情報・1] 「精神的ヨクセイ」, 「歯」
[情報・2] 「精神安定剤」
[情報・4] 「精神安定剤」
[情報・6] 「精神安定剤」
[情報・7] 「精神安定剤」
[情報・8] 「精神安定剤」
[情報・14] 「精神安定剤」, 「アングラ雑誌 B・一〇〇」
[情報・22] 「アングラ新聞 B・一〇〇」
[情報・23] 「地下百階」
[情報・25] 「地下百階」
[情報・26] 「地下百階」
[情報・27] 「地下百階」
[情報・28] 「地下革命軍」

以上のような操作を行った上で、次のような試作を行った。

- ① 単純に関連付けを行っただけの作成例
- ② トレイルを明示した作成例
- ③ トレイルを丸ごと表示した作成例
- ④ レクシをランダムに選択可能とした作成例

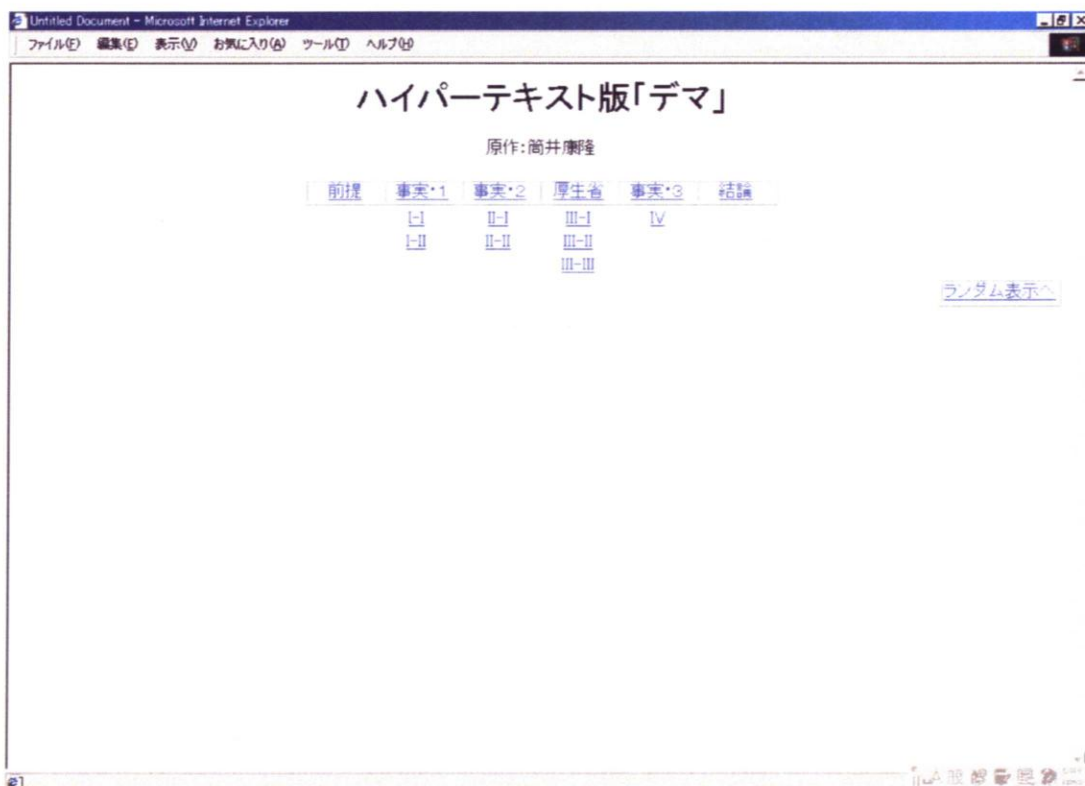
①は最も単純な作成例である。レクシが独立して表示されるが、読者はテキスト全体の中でどの部分を読んでいるのか把握することができない。

②は①の短所を補うために選択したレクシが属するトレイルを明示したものである。②もレクシは独立して表示されるが、方向が逆になったり実装不可能なリンクが残る。

③はレクシ相互ではなく、トレイルをレクシの塊として示し、手掛かり語によってトレイル相互を関連付けたものである。レクシではなく、文や語のレベルで関連付けを行うことを考えたが、構成要素を細分化してしまうと読書の際に参照が煩雑となってしまう。そ

ここで、反対に構成要素を大きくすることによってレクシの関係までも同時に把握可能となるような、トレイルを丸ごと表示する手法を採用した。これによってテキスト全体におけるマルチスレッド構造を示すことも可能となった。

④は読者がランダムに読み進めることを可能とした作成例である。①で短所とした点を利用し、リンク及びトレイル構造を無視して、読者による新たなトレイルの生成やテキストの追加までも視野に収めたものである。

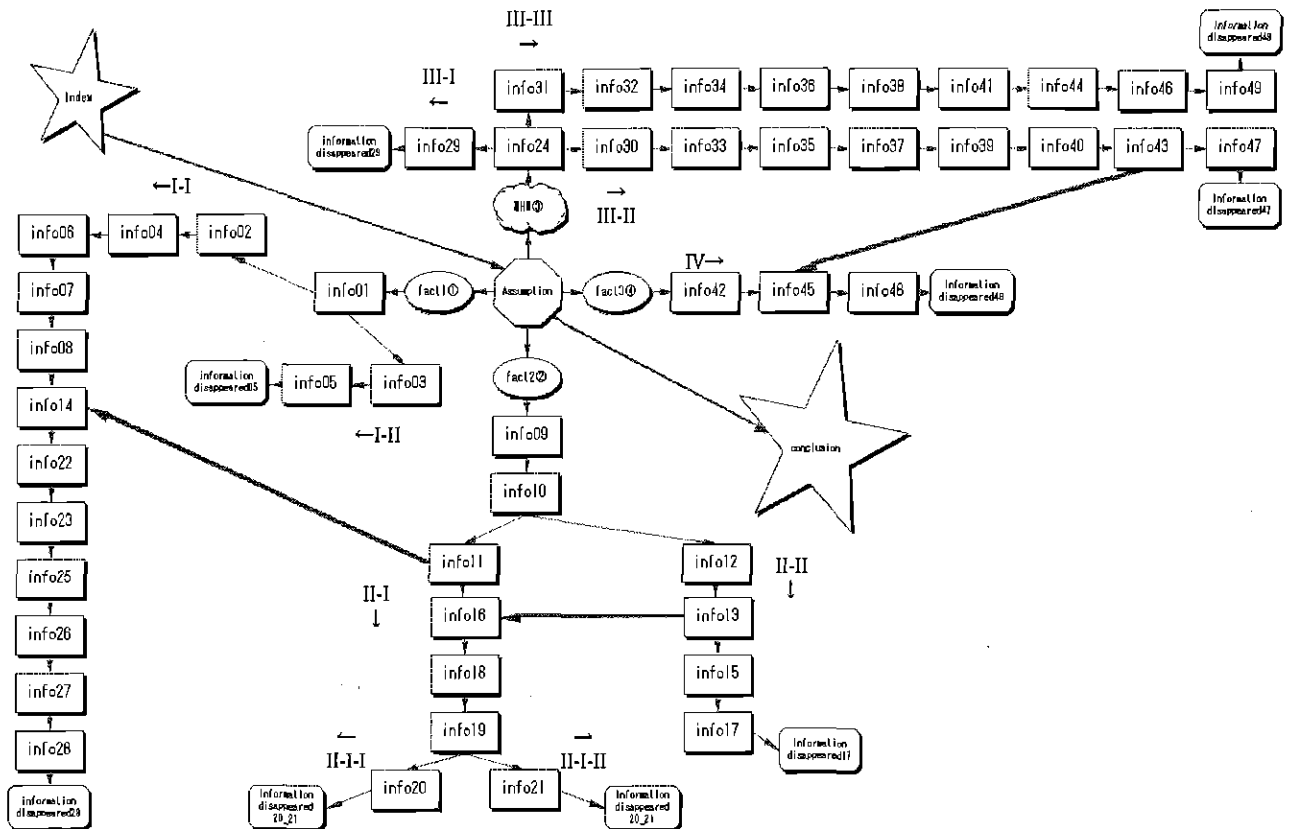


<図 3-5 : ハイパーテキスト版「デマ」>

3-5 受容理論に基づくハイパーテキスト

ここまで本章では、文学理論のコンピュータへの応用の一例として、受容理論に基づく既存小説のハイパーテキスト化について考察した。既存小説のハイパーテキスト化によって、ハイパーテキスト小説を作成する際の方法や課題、問題点も明らかになる。第3節の試作は、既存の小説のうち表記方法が特殊なものを選び、ハイパーテキスト化にあたってどのような問題点があるのかを明らかにした。作者が原作で明示したリンクは忠実に実装

したが、リンクが不可能なものやリンクの方向が逆向きになってしまうものがあった。これについては、3-2 節で述べた見解に従い、作者の意図を追究するのではなく読者に多様な「読み」の可能性を提供する手法を獲得できるよう、次章で試作例の評価実験を行う。



<図 3-6 : 「デマ」のトレイル構造>

なお、本章と第 5 章はともにコミュニケーション・モデルを用いていることが一つの共通点である。より詳細な関連性については第 5 章末尾を参照されたい。

ここでは、ハイパーテキストを中心に据えた観点から本章以降の各章の関連性について概観しておく。本章では、受容理論に基づくハイパーテキスト変換の実例を示した。これは、読者による自由な読みの擁護である。第 4 章では、ハイパーテキストを新たな表現技法の具体例として読者に示す実験を行う。これは、ノン・リニア読書の実現であり、シーケ

ンシヤルな行為としての読書との差異を明確にすることが可能なかを問うことになる。換言すると3章と4章は、新たな表現の技法と新たな読書の技法を検討するためにハイパーテキストを用いる実例を示すことになる。実際には第4章で詳細に展開されるが、予め指摘しておけば、ノンリニア読書という行為そのものを従来のシーケンシヤルな読書から区別することは本研究においては不可能である。読書行為の解明を主目的としなかったためではあるが、第4章の読解実験では、ハイパーテキスト版を読む前に被験者には紙媒体で原テキストを読んでもらっている。

これに対して第5章では、文学テキストから論理構造を抽出する具体例を示す。そして第6章では抽出した論理構造に基づいて文学テキストのハイパーテキスト変換を行う。つまり、ハイパーテキストを論理構造の乗り物として位置づけている。文学テキストを物語構造ではなく論理構造によって分析する手法から出発し、恣意性を排したハイパーテキストへの変換を目指す試みである。蛇足ながら、この「論理構造の乗り物」から「様々な表現手段の原型」へハイパーテキストの概念を拡張させるのが第7章の目的である。